

非行少年の家庭環境について

田頭愛子

目次

0. はじめに
1. 実際の家庭環境の調査
2. 親からされたことの調査
3. 学者から見た傾向
4. 対策
5. まとめ

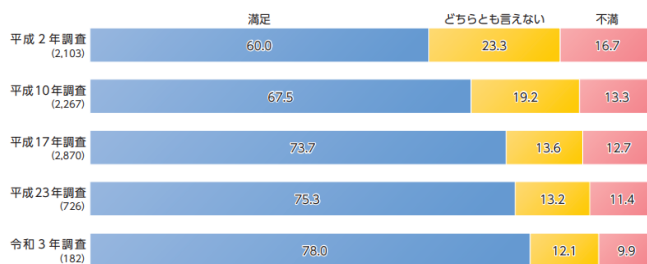
0. はじめに

非行少年が非行に走る原因について考える際、家庭環境や交友関係が拳がることが多いように感じる。実際に少年には親から虐待を受けてきた、悪い仲間とつるんできた、親との関係が複雑などの背景があるので、元をたどれば家庭環境に何かしらの問題があるのは間違いないだろう。

昨年、自立支援施設や少年院内を見学させてもらった際に親への手紙が飾ってあるコーナーがあり、そこには親への感謝や謝罪が書かれてあった。そこでの説明でも8割以上の少年たちが親との問題があるとのことだった。実際の家庭環境はどうか気になったため、このテーマを選定した。

1. 実際の家庭環境の調査

令和5年度犯罪白書では、非行少年に関する様々な調査が行われている。この白書を参照して、少年たちのおかれている環境について紐解いていく。

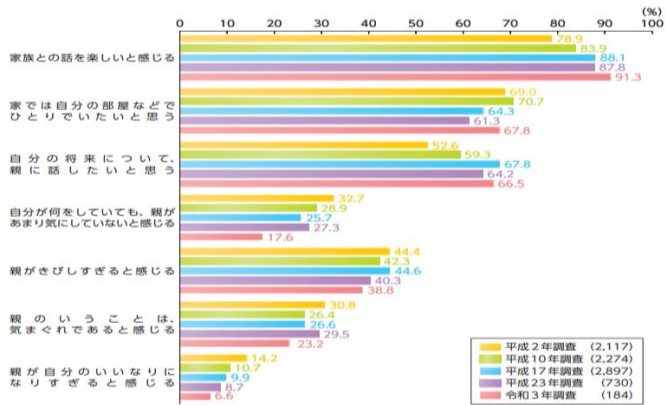


注 1 令和4年版犯罪白書第8編第4章第5節からの再掲である。
2 家庭生活に対する満足度が不詳の者を除く。
3 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計した構成比であり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計した構成比である。
4 () 内は、実人員である。

少年鑑別所入所者の家庭生活に関する満足度を調査したグラフである。これによると、入所者は令和3年調査では約8割が家庭生活に満足していると言える。¹

¹ 令和5年度 犯罪白書（法務省）2024年12月31日閲覧

<https://www.moj.go.jp/content/001410095.pdf>



注 1 法務総合研究所の調査による。
 2 家族との関係の各項目が不詳の者を除く。
 3 各項目について、「よくある」又は「ときどきある」に該当した者の比率である。
 4 凡例の()内は、調査年別の総人数である。

上記のグラフは少年鑑別所入所者の家族との関係を調査したもののだが、家族との時間が楽しいと感じると答えたのは令和3年では9割以上であった。自分の将来に関して親に話したいと答えたのは6.5割以上であった。しかし、親は自分に関して関心がないように思えるが17%、親が厳しすぎるが約4割、親は気まぐれであると答えたのは2割と親に関して難しい見解を表した者も一定数いる。²



これは少年院在院者と保護観察処分少年に対して家族としたことのある経験を調査したものである。学校行事に親が来る、動物園や水族館、テーマパークなどに遊びに行った経験のある少年はどちらも8割以上であった。親戚づきあいもよくしていたようだ。映画や演劇を見に行く、家族旅行をするも7割を超えた。³

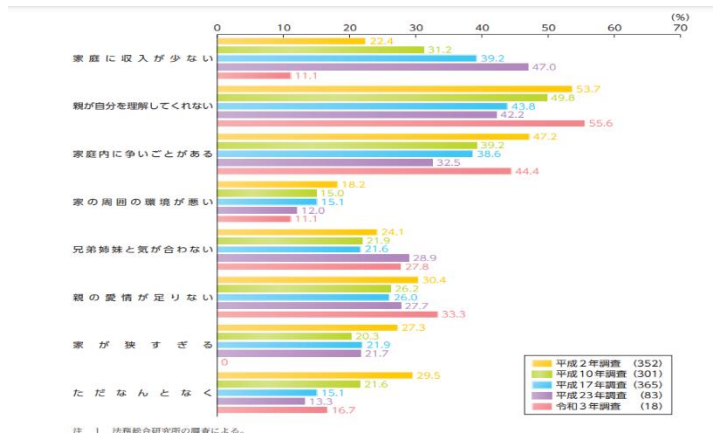
しかし、地域との関わり合いや一緒に調べ物をする、図書館に行くなど、家族以外のかかわりや知的好奇心を刺激するような行為を一緒にしたと答えたのは半数から半数を切

² 令和5年度犯罪白書 2024年12月31日閲覧

<https://www.moj.go.jp/content/001410095.pdf>

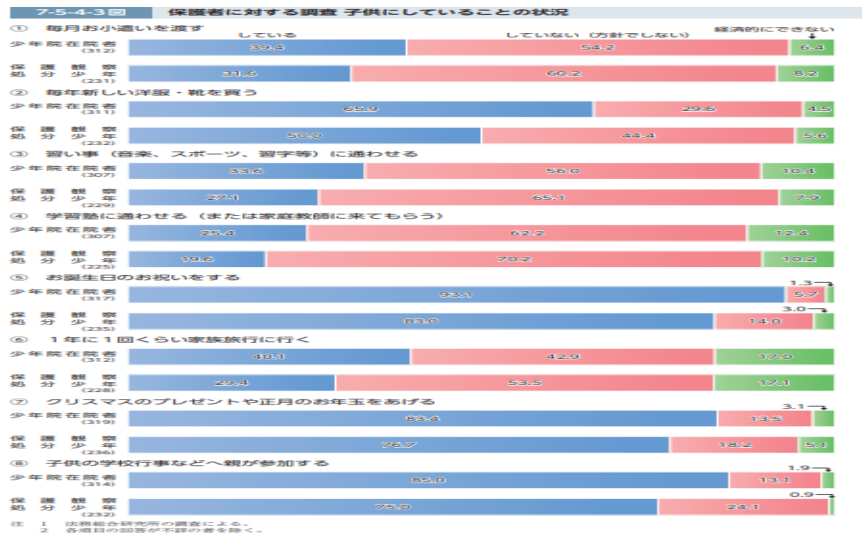
³ 同上

った。⁴



少年が家庭生活に抱いている不満を調査したものである。親が自分を理解してくれないことを筆頭に家庭内に争いがある、親の愛情が足りないなどの不満が多くあげられた。平成23年調査よりも家庭に収入が少ないことへの不満が大幅に減少しており気になった。⁵

2. 親からされたことの調査



これは、保護者に対して子供にしていることの調査である。お誕生日のお祝いをしていたり、クリスマスのプレゼントやお年玉をあげたり、服や靴をあげるといった、何かをプレゼントする行為は7～8割の保護者が行っているようだ。また、学校行事に参加している保護者も多かった。しかし、習い事をさせたり、塾に通わせたりした保護者は少なかった。

⁴ 令和5年度犯罪白書 2024年12月31日閲覧

<https://www.moj.go.jp/content/001410095.pdf>

⁵ 同上

た。習い事をしていると親同士でも知り合えるので、親の孤独を減少させる手助けになるのではないかと思う。また、通っている学校で友達ができなくても習い事の間でできることもあるので非行につながりにくくなることもあるかもしれない。⁶

3. 学者からみた傾向

非行少年の中には、虐待を受けてきた少年たちが多く、虐待から逃れるために非行に走るケースも少なくない。このことを虐待回避型非行という。これだけでは終わらず、当初の目的が薄れて、次第に非行が本格化していくこともある。虐待から逃れるためであったはずの非行が刺激や快楽を求めた非行に移るといった目的の変化があげられる。

例え自分が悪い方向に向かっていると分かっているとしても、彼らにとっては家よりも非行集団の中にいる方が心は安定し、お互いに傷をなめ合うような関係性であってもそちらのほうがよいのである。非行を繰り返していくうちに、家庭を回避する以上に積極的な気持ちで非行集団と関わるようになる。⁷

犯罪心理学者の出口保行氏による全国の少年鑑別所に収容されている少年を対象に「心理的距離」の調査では、SD法という心理学的手法により、父親、母親、きょうだい、友だちなどについて心の距離を調べたところ、家族よりも友だちのほうが心理的距離が近いという結果が出た。⁸

家族はわかってくれる、自分を認めてくれる、家族には何でも相談できると思えるような家族が通常だが、少年たちにとってはそうではなく、非行集団にいる友だち、親友を頼りにしており、大切に考えていた。⁹

保護者からじゅうぶんに愛情を得られないまま育つと、愛情飢餓状態が続き、愛情飢餓状態では、ごく普通のやさしさにも過剰に反応し、強く惹かれやすくなる。そもそも、無関心な親に育てられた子はコミュニケーションに問題を抱えていることが多く、「誰からも相手にされない」と孤独感を強めてしまう。また、社会的な視野も狭いので、「この人しかいない」「この人のためになら何でもできる」と思うことさえあり、非行少年たちは利用されやすく、危険な状態である。¹⁰

4. 対策

子ども虐待は、子どもの生命に関わる問題であると同時に、本来最も安心できるはずだった場所、本来最も愛してくれるはずだった保護者から裏切られたと感じながら、その場所で育っていかねばならないという、子どもにとっては人権侵害の問題である。

この問題は、子どもの心に大きな傷を残し、情緒面や行動面の問題、社会性や対人関係

⁶ 令和5年度犯罪白書 2024年12月31日閲覧

<https://www.moj.go.jp/content/001410095.pdf>

⁷ 東洋経済オンライン「愛情不足のまま育った子」が大人になり陥る末路 出口保行

<https://toyokeizai.net/articles/-/689481?page=4>

⁸ 同上

⁹ 同上

¹⁰ 同上

上の困難性を抱える場合も少なくない。そのことは自分の子育てにも影響し、世代を越えて、その影響が引き継がれる可能性がある。

また、虐待する保護者を見れば、根強い母親役割の強要や核家族化の影響からくる未経験や未熟さなどがある。それらのストレスのはげ口を、家族内の弱者である子どもに向けてしかない状況で、一人ではどうにもできずにもがいているのである。

これらのことを踏まえ、子ども虐待は、発生後の長期にわたるケアに奮闘するばかりでなく、子どもの生命や人権を、最初から傷つけずに守り抜く意識をもち、心身ともに健全に成長・発達できるように支援していく体制を充実させていく発生予防の取組が大切なのである。孤独な育児にならないように社会とのつながりを持つこと、身近にどんな子育て支援サービスがあるのか知っておくことが必要である。

先日、東京都立萩山実務学校にお話を伺ってきた。入所してきた少年たちの8割～9割は親から虐待をされてきているようだ。出所後の家族との再統合を目指しているそうだが、最近落ちてきたようだ。しかし、再統合できなくても少年と親とのつながっておくことは大事にしており、見守るようにしているようだ。予防の対策も大いに必要だが、起こってしまった後の対応も肝要である。

5. まとめ

少年は家庭に関して必ずしもネガティブな感情だけではないが、虐待などをされた経験がある少年が非行をするというケースが主流である。また、普通の家庭で虐待やネグレクトをされていなくても愛情不足により非行に走ることもあるため、家庭環境に何かしらの問題があるのは間違いなさそうである。

虐待は連鎖するという言葉がある。家庭環境が悪いのは親の責任である。親の虐待や愛情不足、子どもをきちんと教育できていないなど、子どもの非行がすべて悪いわけではない。しかし、親も子育ては初めてなわけで、責任はあれど、色々と事情はあるはずだ。そのため、親に対する支援が必要であると考え。少年たちに対する支援というのは数多くあるが、孤独を感じていたり、自分をコントロールできていなかったりする親に対する支援はあったとしても必要な人に届いていないのではないだろうか。行政などは、支援を拡充したり、周知したりして、少しでも家庭環境が良くなる工夫を施していかなければならない。

参考資料

令和5年度犯罪白書

東洋経済オンライン「愛情不足のまま育った子」が大人になり陥る末路 著者：出口保行